

京都大学	博士(文学)	氏名	濱 西 栄 司
論文題目	新しいグローバル運動の社会学 ― 経験運動論とメカニズム		
(論文内容の要旨) 現在、社会運動に関する研究は大きく二つの系譜に分かれている。一つは「社会（的）な運動」と同定された組織の動員メカニズムを検証するアメリカ中心の「動員論」的研究であり、もう一つは、ある一つの社会の全体的な変動を一挙にもたらす「(全体) 社会 (の) 運動」という理想型に照らして現実の活動を評価する欧州型の「行為論」的研究である。このような現状にあって、本論文は、「行為論」の系譜から提起された「経験運動」という新しい視座・概念に基づき、札幌、ローマ、ピッツバーグ、コペンハーゲンにおける現地調査を踏まえて、新しい理論的枠組みを提起しようとするものである。 「経験運動」研究の視点をふまえつつ、本研究では、以下の2点において更なる理論的展開を目指す。すなわち、1点目は「経験運動」を実体化せず、明確に「要素」として理論化することであり、2点目は「経験運動」を具体的な制度・組織・相互行為と接続することである。本論文では、この2つの課題をめぐって理論的探求と実証研究を通して検討している。 まず1章では、従来の社会運動論研究のなかに、2つの課題を解決する方策を見いだそうと試みた。まず「動員論」と「行為論」という社会運動論の国際的レベルでの方法論的分裂を確認した上で、運動の特定の「質（歴史性や創発性）」が形成されるメカニズムに焦点を当てた視点を提起した。そして、特定の「質」の形成と、制度構造・組織連関・相互行為とを関連付ける作業をおこない、それを通じて、運動のメカニズムを明らかにする際にも運動を実体化せずに特定の「質」に焦点を合わせた説明モデルが構築できるということを示した。 2章では、「行為論」をけん引するアラン・トゥレーヌの50年に及ぶ理論的展開を踏まえ、彼が近年、提起している、「(個人の) 文化（的指向性をめぐる闘いを守る）運動」論を検討した。この概念が実体ではなく要素として提起されていることを確認し、「文化運動」要素の形成を制度・組織・相互行為から説明できることを示した。 3章では、「文化運動」論を土台とする「(個人の複雑な) 経験（をめぐる闘いを守る）運動」論とその理論的背景を検討した。まず「経験運動」が実体ではなく、文化的指向性に限定されない個々人の極めて複雑な経験に焦点を置き、一社会に限定されないグローバルな世界に準拠し、さらに隙間や多義性を残すことで参加者個々人の想像性や自由な解釈を呼びこむ活動の側面(要素)を指すことを確認した。またその意味で、「集合的アイデンティティ」の要素とは対照的な関係にあることが示され、その上で、			

「経験運動」要素の形成が制度・組織・相互行為レベルと接続できることを明らかにした。

以上の理論的検討をふまえて、4章以降では、グローバル運動の代表格と言える G8 や G20、WTO、COP などの国際的なサミットに対するプロテスト活動に関する実証研究を行なった。

まず4章では、2008年洞爺湖 G8 サミットへの抗議活動に参加した若い参加者とローカル・オーガナイザーの経験と語りとを分析した。その結果、個々人の具体的な過去・現在の経験と集合的アイデンティティの間に揺れ動く複雑なプロセスが参加者一人一人のなかに存在していることを明らかにし、また前者を強く求める日本の若者の背景についても考察を行なった。

5・6・7章では、個々人の経験の中に現れる経験運動と集合的アイデンティティの偏りや変容の過程と、相互行為・組織連関・制度構造レベルとの接続を試みた。

5章では、札幌、ローマ、ピッツバーグ、コペンハーゲンでのサミット・プロテストを、とくに実力行使をおこなう直接行動派の活動を事例として、「経験運動」的な要素形成の条件を相互行為レベルにおいて分析した。その結果、サミット会場付近でのデモ、踊りや人形作りなどの経験運動的な要素の展開が、個人の利用可能なインフラ設備（宿泊・食事・作業場）や住民感情などのローカル空間の状況と、相互行為のレベルで密接に関係していることを明らかにした。

6章では、日本とイタリアで開催された G8 サミットを主な事例として、「経験運動」と組織レベルとの関係性を考察した。その結果、一社会を超えたサミット・プロテストを支えるものが、経験運動的な要素と組織的な要素とのあいだの「作業協定」や「ローカル優先原理」に基づく多元的な承認関係であることを明らかにした。

7章では、サミット・プロテストの国際比較研究と福祉レジーム研究とを踏まえて、経験運動的な特徴を有するプロテスト・ネットワークの歴史的展開と、若者たちが直接行動派を主導する状況とを、先進資本主義諸国の「新しい社会的リスク」、世界的な「自由主義的ソーシャル・ガバナンス」化と関係づけて考察した。

結論では、上記した事をまとめ、従来の組織を中心とした「動員」モデルに代わる個人と制度・組織・相互行為の関係を重視した新しい説明モデルの可能性と、経験運動論の一般化可能性について考察を試みた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、グローバル化する現代社会における社会運動の新たな動きを対象に、世界各地の運動の現場に赴きインタビュー調査や参与観察を通じてデータ収集を実施するとともに、従来の社会運動論の理論枠組みの再構築を展望した意欲的な研究の成果である。

現在、社会運動をめぐる社会学研究は、大きく二つの流れに分類することができる。ひとつは、アメリカ合衆国の研究者などが進めてきたものであり、現代社会学においては資源動員論の流れに代表される。参加者の心理的要因を重視したそれまでの集合行動論を批判し、資源の動員・活用、コストの把握やそれに基づいた合理的な戦略・戦術に注目したこの潮流を、濱西さんは、「動員論」として整理している。もうひとつは、ヨーロッパにおける社会運動論の流れであり、階級闘争型の労働運動や社会主義運動といった全体社会の変動と密接に関連した集合的主体を対象にする研究を源流としている。この潮流もまた、1970年代以後、それまでの産業社会の変容にともなう運動の変化に着目し、大きなパラダイム変容を生み出した。フランスのアラン・トゥレーヌに代表される「新しい社会運動」研究の潮流である。社会運動を歴史形成と社会的再生産の最重要の行為主体としてとらえるトゥレーヌらの潮流を、濱西さんは、「行為論」という概念で把握している。

本論文は、まず、社会運動理論の歴史的展開を、「動員論」の潮流と「行為論」の潮流それぞれについて、両者の相互の影響関係も視野にいれつつ整理する。その上で、これら二つの流れが、現在急浮上しつつあるグローバル運動という新しい社会運動について十分に説明しうる理論枠組みが準備できていない現状を明らかにしている。実際、1990年代後半以後国際的な広がりを見せる反グローバリズム運動の動きは、多様な文化的・政治的・経済的背景をもったさまざまな個人・グループによって担われており、ここには、しばしば統一した集团的アイデンティティも、統一された中枢も存在していない。このことは、これまでの集合的アイデンティティを前提とし組織家やリーダーによる動員といった視座で社会運動をとらえることの限界を明らかにし、新たな理論枠組みの必要性を要請しているのである。

こうした社会運動理論の新たなパラダイムの要請を前に、濱西さんは、「行為論」の潮流内部から生まれつつある、個人の身体感覚や空間の活用といった経験の重なり合いのなかで社会運動をとらえようという、フランスのF.デュベやオーストラリアのK.マクドナルドといった研究者たちの「経験運動」モデルの有効性について理論的な整理を試みている。

現代社会運動理論の諸潮流をめぐる理論的な整理の上で、濱西さんは、現実にはグローバル運動が展開されている現地に赴き調査を実施し、グローバル運動の形成と展開のプロセスの観察や参加者の聞き取り等を整理し、この運動の具体的実態を、従来の「連帯性 solidarity」概念に代わって、「流帯性 fluidarity」という視座から考察している。

個々人や個別グループのバラバラの運動が全体として大きな流れとしてのコモン・アクションへと形成されていくプロセスを意味するこの概念は、濱西さんが強い影響を受けて来たマクドナルドが、サミット反対運動研究のなかで示唆を受けたものである。

こうした独自の現地調査に基づく知見に基づき、結論では、個々人ないし個々のグループの具体的な身体感覚や空間の活用、さらには相互行為を通じて展開されつつある社会運動を「経験モデル」の視座から考察することの有効性が明らかにされている。

本論文の最大の意義は、すでにふれたように「動員論」的潮流か「行為論」的潮流か、という二分法のなかで議論されてきた社会運動理論を、グローバルレベルでの具体的な運動実態のなかで検証し、そこから両者がとらえ得なかった新たな動きを導きだし、それらを社会運動論の枠組みに新たに組み込もうと試みた点に求められる。特に、固定的な連帯の構造や集合的アイデンティティに縛られることのない、個々の参加者、個別グループの動きが、彼ら彼女らの身体感覚や空間活用、相互行為を通じて大きな運動として成立していくプロセスの考察は、今後の社会運動研究にとってきわめて示唆的である。

また、反グローバル運動を対象に、運動の現場での個々のグループの動き、さらにはグループ間の調整や個々の参加者の意識等をめぐって、繰り返し熱心な実態調査を行った点も高く評価できる。札幌、ローマ、ピッツバーグ、コペンハーゲンなど、大衆的な抗議運動の現場に赴き、運動参加者の行動、彼ら彼女らをとりまく空間配置、各グループ間のネットワーク形成や調整などをめぐって、冷静な観察を行うとともに、それを聞き取り等により補うことで、反グローバル運動の実態を明らかにすることに成功している。

さらに、こうした現地での調査と分析を踏まえ、それを社会運動研究における新たな理論構築へと結合させたことの意味は大きい。濱西さんの提起した社会運動における「経験モデル」という視座は、グローバル運動の分析に止まらず、世界各地で展開しつつある新たな運動、たとえば、メキシコのサパティスタ運動などにも共通して見られる傾向であり、社会運動理論の今後の発展にとってきわめて大きな意義をもっている。

しかし、新たな理論構築をめざそうという意欲に溢れるあまり、現実の調査結果をいささか無理矢理に理論の枠にはめ込もうとする傾向がみられる点がある。また、難解な概念を未消化のまま使用しているところも散見される。ただし、こうした欠点は、今後の研究の中で改善可能であり、大きな瑕疵とは考えられない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2010年5月25日、審査員4名が論文内容とそれに関連した事柄についての口頭試問を行った結果、合格と認めた。